

ななくさの記

富田惣七

春

すずな

かぶ。万葉では“あをな”。古書に蕪、菁、阿乎名とあり。

すずしろ

大根。記紀にオホネ。

せり

丈夫と思へるものを刀佩きて

かにはの田井に芹ぞ摘みける

せりという名は、セリアフ、セリダスなど、群がって生えて、いくら摘んでもあとからあとから生えてくる事からついた、と古今要覽稿に出ている由。尚万葉の昔から、自生のものもあるが栽培もしていたらしいことが、歌にもいろいろ出ているとのこと。

なぎな

ベンベン草のこととは聞いていました。しかし花茎がのびて小さい十文字の花が咲く頃になればすぐ分りますが、丁度食べごろという時に、草原の中から見つけ出すことは、私にはできません。そのせいかどうかまだ食べた事はありません。

その実が三味線のばちの形に似ているのでその名がついたといわれますが、あのうらわびしげな姿はとてもよいものです。

おぎょう(ごぎょう)

春浅いころ、畑のすみなどに、こまかい毛につゝまれた、いかにも柔らかげな葉のかたまりをみます。

しかし何せハハコグサがおぎょうだとはつい近年まで知らなかったので、これも又食べたことがありません。ただ小さい頃餅につきこんだものを食べたような記憶がありますが。その時、その餅を馳走してくれた人が、これにはハハコグサが入っているんですよ、と言ったかどうかは覚えていません。それなのに妙なことには、おぎょうが入っているのですとは言わなかった、と変にはっきり記憶にあります。何にしても記憶というものは不思議なものです。

はこべら

中学一、二年の頃大事に飼っていた“七宝鳥”のためによく1堤防へ摘みにいきました。あとになってあの千曲川旅情のうたで“はこべはもえず 若草もしくによしなし”を読んだとき、ふとあの柔らかでくねくねと、ところどころで曲っているような持ちにくかったこの草の事を思い出しました。

ほとけのざ

本当の“ほとけのざ”は三階草のことで七草のほとけのざはタビラコだそうです。

田圃のあぜなどに円座に葉をひろげた黄色い花を見ると、ああまた新しい年度がはじまるのか、と思うのです。

もっとも私には、中学の卒業式の終ったあと、三、四人の同級生と、もう必要のなくなつた制服をよごそと、春のひざしの中をかけ廻ったあの土の匂いが、悲しい一コマとして思いだされます。その時、野をかけ、タビラコが一ぱい咲いた上に大の字に寝てまぶしい空をながめた仲間たちは、みんな戦争で死んでしまいました。

秋

万葉集の山上憶良の歌に

秋の野に咲きたる花を指折りて
かき数うたれば七草の花
萩が花尾花葛花なでしこの花
女郎花また藤袴朝貌の花

尾花がススキで、朝がおの花がキキョウの万葉呼名であるのは言うまでもありません。

ススキ

それは本当に詩や歌のためにあるような草です。

子規は“薄とも芦ともつかず枯にけり”、也有は“化物の正体見たり枯尾花”とうたいました。鬼貫に“面白さ急には見えぬ薄かな”の名句があり、芭蕉十哲の一人杉風の句にも“風のたび道付替るすすきかな”というのがあります。

特に鬼貫の名句は、わたしたちの祖先の非凡な鋭どい詩情が強く心を打ちます。

更に名句をあげれば、蕪村の“山は暮れて野は黄昏のすすき哉”です。高原のひるどき、野末の夕まぐれ、尾花はまさに七草の圧巻といえましょう。

だから憶良も

人皆は萩を秋と言ふよし吾は
尾花が末を秋とは言はむ

とうたうのです。

萩

これも名句が多くその中でも芭蕉の“ひとつやに遊女もねたり萩と月”がやはり一段と心ひかれます。もう一つ加えてみると、普羅の句に“井浚ひの始まる萩を束ねけり”とあり、心暖まる情景が浮かんできます。

葛

葛湯のクズ、あの猛烈なのびかたで大木もたちまちおおいつくしてしまうクズです。葉陰の紅紫色のひとかたまりを切りとり、持って帰って机の上に、ガラスのコップにでも入れて置きますと、この花の値打ちがよくわかります。

女郎花

秋の七草の中では一番美しい。その草丈の高さが、いやでも空を背景とするから、秋空の青さの中の黄色が一段と輝くのであります。

大伴家持の歌に

手にとれば袖さへ匂ふ女郎花
この白露に散らまく惜しも

藤袴

その字の感じからさぞかしとその姿を想像してみるのですが、残念ながら素人の私はまだお目にかかった事ありません。

何でも数少なくて、人が藤袴というのはサワヒヨドリという草であることが多いと言われています。この葉は生乾きのとき佳い香を発するといいます。

なでしこ

笠女郎（かさのいらつめ）の歌に

野辺見れば撫子の花咲きにけり
わが待つ秋は近づくらしも

とあって、秋の来るのを知らせる花として家持なども好んだといいます。

私はこの淡紅色の、茎のちょっと堅げな草に、余り若くない女の、すこしあでやか過ぎるのを見るようで余り好きではありません。

ご承知の通り春の七草は実際の生活の中に、秋の七草は詩の世界、情感の世界の中にあって、日本人の自然に対応するしみじみとした息吹きがうかがわれます。

私は何時もこういう事に執心するのですが、それはこういう事が人間の本当の生活だと思うからです。自然と自分とが、区別がつかないでこんがらがって生きている、それが生きざまというものだと思うのです。

今日はどうでしょう。もうすっかり人と自然是意識の中で区分を作り、何か“あるもの”としてあしらっているではありませんか。